



柔道授業における安全性と発達段階に応じた教材開発

與儀, 幸朝

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2022-03-04

(Date of Publication)

2024-03-04

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙第3410号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003410>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要約

氏名 與儀 幸朝

論文題目

柔道授業における安全性と発達段階に応じた教材開発

内容の要約

2012年度に中学校で武道領域が必修化となる頃、柔道の危険性がマスメディアで取り上げられたことで社会的な関心を集めた。先行研究では、柔道の死亡率が他のスポーツ種目と比べて突出して高いことが報告されており、投げ技や受け身などの柔道固有の動作に問題があることも指摘されている。その一方で、2018年に改訂された中学校学習指導要領（文部科学省，2018）の基本的な考え方には、「児童生徒の発達段階を踏まえて小中高を通じて系統性のある指導」が明記されているにも関わらず、武道領域においては小学校体育科から中学校保健体育科への系統的なカリキュラムが編成されていない。そのような状況の下で、中学校学習指導要領に示されている運動領域と、小学校体育科における運動領域の接続を考えると、柔道を含む武道領域の運動に近い内容となっているのは、「体づくり運動」領域の「多様な動きをつくる運動（遊び）」以外には見当たらない。そこで本研究では、「柔道授業における安全性と発達段階に応じた教材開発」の研究主題を追究するために、先行研究や調査報告書で示されていない柔道授業における安全性の実態を明らかにして、運動教材としての柔道を評価し、小学校体育科と中学校保健体育科における運動領域の接続を図るために、発達段階に応じた教材を開発することを目的とした。

柔道授業の安全性については、中学校の保健体育科教員を対象とした調査および柔道授業を初めて学習する生徒を対象とした調査を行った。本論文の第2章では、鹿児島県の中学校に在籍する保健体育科教員を対象として、柔道授業における安全性や学習指導について自記式質問紙による調査を行った。第3章では、福岡市の生徒を対象に柔道授業における安全性への不安や楽しさ、学習の価値について自記式質問紙による調査を行った。教員を対象とした調査では、柔道授業においては重大事故や怪我の危険性から特性を味わう学習指導が展開できないことがあると回答した教員が約70%存在することが示された。また、投げ技、固め技、簡単な試合等において、体格差は考慮しているが体力差を考慮している教員の割合が低いことも示された。さらに、技能の指導においては、投げ技では、膝車、支えつり込み足、大外刈りの「取」の指導が「受」の指導に比べて難しく、固め技では、けさ固め、横四方固め、上四方固めの「受」の指導が「取」の指導に比べて難しいと回答している教員が多いことも示された。生徒を対象とした調査では、単元前に柔道への安全性に不安を抱いている生徒は、男子が49.9%、女子が64.5%であったが、単元後はいずれも減少した。しかし、単元後も男子女子ともに約20%以上の生徒が不安を抱いている実態が示された。柔道に対する楽しさについては、男子女子ともに単元前より単元後に大幅に増加した。男子は攻防の魅力に楽しさを感じる傾向があり、女子は自分や友達の体力への気づきに楽しさを感じる傾向が示唆された。学習の価値については、男子女子ともに「柔

道の学習は将来に役に立つ」, 「柔道の礼法は日常生活に役に立つ」と肯定的に考えていることが示された。また, 男子では「柔道の受け身は日常生活に役に立つ」と肯定的に捉えていることが判明した。

これまで柔道授業の研究では, 川戸 (2015) による器械運動領域の「マット運動」と柔道との連結に着目した研究や, 小澤ほか (2012) による安全で効果的な授業を行うための方法として「形」を取り入れた授業づくりなどが報告されている。しかし, 多くの学校では中学校学習指導要領および中学校学習指導要領解説保健体育編に示されている内容を基本として, 単元を構成して授業を実践している。従って, 運動教材としての柔道を評価するには, 学習指導要領を基本とした柔道授業を実践することが重要である。そこで第4章では, 全日本柔道連盟 (2010) が必修化前に学校現場における柔道授業の充実を図ることを目的として, 学習指導要領に準拠した内容で作成した「柔道」授業づくり教本を用いて授業を実践し, 柔道授業を初めて学習する際に生徒の学習意欲がどのように変化するかについて検討した。その結果, 学習意欲検査 (AMPET) では「学習ストラテジー」, 「困難の克服」, 「学習の規範的態度」, 「学習の価値」の4つの下位尺度で単元前より単元後の得点が高くなった。また, AMPETの「学習ストラテジー」, 「困難の克服」, 「学習の規範的態度」, 「運動の有能感」, 「学習の価値」の5つの下位尺度の合計得点で示す『意欲的側面』の比較でも, 単元前より単元後に得点が高くなった。生徒の学習意欲を幅広く捉えることを目的として行った主観的評価においても学習意欲が肯定的に変化することが示された。第5章では, 学校現場の実態に即した単元の配当時間を設定し, 基本動作や受け身, 投げ技, 固め技など学習指導要領に示されている内容で単元計画を作成して柔道授業を実践した。そのうえで, 形成的授業評価や技の習熟度の自己評価から学習指導における課題を検討した。形成的授業評価では, 男子女子ともに全体的な傾向として, 単元の学習過程が進むにつれて全ての下位尺度得点 (「成果」, 「意欲・関心」, 「学び方」, 「協力」) および総合評価得点が向上することが示されたことから, 本研究で作成した単元計画は柔道を初めて学習する中学生を対象とした授業では, 学習効果があることが示唆された。技の習熟度の自己評価では, 習得段階での「体落とし」が生徒にとって難しい技であることが判明した。体落としの指導においては, 中学校学習指導要領解説保健体育編 (文部科学省, 2008) および柔道指導の手引 (文部科学省, 2013) と「柔道」授業づくり教本 (全日本柔道連盟, 2010) とでは, 技をかける『取』の体さばきが異なった表記になっていることや, 『取』の釣り手や引き手の腕の使い方が示されていないという課題・問題点が指摘された。

小学校体育科から中学校保健体育科へと柔道の系統的なカリキュラムを構想する観点から, 第6章では小学校の低学年を対象とした体づくり運動領域の多様な動きをつくる運動遊びにおいて, 柔道の基本的な動きを学習内容として取り入れた教材を開発し, その有用性について2回の授業実践から検討した。教材開発を進めていくうえでは, 第2章および第3章で示された柔道授業における安全性の実態を踏まえて, 授業実践での安全性に配慮しながら児童の発達段階に応じた学習内容を吟味し, 柔道遊びの単元を構成した。柔道遊びを取り入れた多様な動きをつくる運動遊びの授業1では, 全7時間の単元計画で「体のバランスをとる運動遊び」と「力試しの運動遊び」の2つの運動遊びに焦点化して, 柔道の基本的な動きを取り入れた教材について検討した。その結果, 診断的・総括的授業評価

では「情意目標」と「運動目標」の2因子において単元前より単元後に得点が高まり、主観的評価では5項目中、3項目の得点が単元後半に高まった。柔道遊びを取り入れた多様な動きをつくる運動遊びの授業2では、全6時間の単元計画で多様な動きをつくる運動遊びの内容として小学校学習指導要領（文部科学省，2018）に示されている全4つの運動遊びで、柔道の基本的な動きを取り入れた教材を検討した。その結果、形成的授業評価では単元の学習過程が進むにつれて「成果」，「学び方」，「協力」の3次元と「総合評価」の得点が向上した。主観的評価では7項目中、6項目の得点が単元後半に高まった。体力・運動技能テストでは男子女子ともに3種目（握力，雑巾ウォーク，横転マーカータッチ）すべての記録が単元終了後に高まった。

本論文では、「柔道授業における安全性と発達段階に応じた教材開発」を研究主題として、柔道授業における安全性について学校現場の実態を明らかにすること、学習指導要領に示された内容で単元を構成して運動教材としての柔道を評価すること、そのうえで小学校から中学校へと柔道を含む武道の運動領域の系統的なカリキュラムを構想する観点から発達段階に応じた教材を開発し、その有用性を検討した。柔道授業の安全性については、東京女子体育大学（2015）や流通経済大学（2020）がスポーツ庁の委託を受けて実施した全国調査の結果、あるいは内田（2011）や星・稲葉（2002）によって報告されている学校現場の柔道の安全性に関する先行研究などとともに、これまで明らかにされてこなかった柔道授業の実態を示すことができたと考えられる。運動教材としての柔道の評価については、柔道授業は単元の学習過程が進むにつれて、生徒の学習意欲や生徒による授業評価および、楽しさや学習の価値の捉え方を肯定的に変化させる可能性が示唆された。このことは、これまで明らかとされてこなかった運動教材としての柔道を評価することができたと考えられる。小学校の低学年を対象とした体づくり運動領域の多様な動きをつくる運動遊びにおいて、柔道の基本的な動きを学習内容として取り入れた教材の開発では、単元の前半や後半、単元終了後に行った授業評価（診断的・総括的授業評価および形成的授業評価）および主観的評価の結果から、児童の柔道遊び教材の捉え方が単元を通して肯定的に変化し、体力・運動技能も高まったことから、本研究で開発した柔道の基本的な動きを学習内容として取り入れた教材は、小学校の低学年を対象とした体づくり運動領域の多様な動きをつくる運動遊びの教材として有用である可能性が示唆された。

以上、本論文で示された「柔道授業の安全性」（第2章・第3章）、「運動教材としての柔道の評価」（第3章・第4章・第5章）、「発達段階に応じた教材開発」（第6章）の結果は、中学校保健体育科における柔道授業を安全に実施していくうえで重要な資料となり、小学校体育科との運動領域の接続を検討していくうえで貴重な報告となると考えられる。